

格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係

森山新

(お茶の水女子大学)

1. はじめに

日本語の格助詞デには以下のように様々な意味がある。

- (1) その会議はアメリカで開かれる。(場所)
- (2) 彼の計画ではこの問題は扱われていない。(抽象的场所)
- (3) エベレストは世界で一番高い山です。(範囲)
- (4) 30人で締め切ります。(数量限定)
- (5) その事件は警察で捜査しています。(動作主)
- (6) 食事のあとで、勉強をします。(時間)
- (7) 成長の過程で一時的に現れる現象です。(期間)
- (8) 長かった夏休みも明日で終わりです。(時限定)
- (9) 日本人は箸でものを食べる。(道具)
- (10) 毎日地下鉄で学校へ来ます。(手段)
- (11) この机は木でできています。(材料)
- (12) 日本文化の特徴という題目で論文を書きました。(構成要素)
- (13) 病気で学校を休む。(原因)
- (14) そういう点でおもしろいと思う。(理由)
- (15) 試験の結果で判断する。(根拠)
- (16) 出張で大阪へ行って来た。(目的)
- (17) タご飯は自分で作って食べます。(動作主の様態)
- (18) 迷惑にならないよう、小さな音で音楽を聞きました。(動作対象の様態)
- (19) 猛スピードで走っています。(作用・できごとの様態)

認知言語学では多義語の意味構造について触れ、様々な動機づけにより順次カテゴリーの拡張が起こり、最終的にはプロトタイプを中心とした放射状カテゴリー構造を持つに至るとしている。また習得との関係から多義語の意味構造を見ると、原則としてプロトタイプの用法の習得が早く、順次その拡張的用法へと習得が進むと考えられている。

本研究は多義語としての格助詞デの放射状カテゴリー構造を解明し、習得との関係を考察することを目的としている。

2. 先行研究

認知言語学的観点からの多義語の放射状カテゴリー構造の研究としては、英語 *over* を研究した Lakoff(1987) や Dewell(1994)、*take* の研究を研究した Norvig & Lakoff(1987)などが代表的である。このうち Lakoff(1987) や Norvig & Lakoff(1987)は、多義語のカテゴリーはプロトタイプ的な意味から、メタファー、メトニミー、イメージスキーマ変換などのさまざまな動機づけによってカテゴリーの拡張が起き、その結果、放射状のネットワークが築かれるとしている。また Dewell(1994)は中心的なイメージスキーマとそこからのイメージスキーマ変換によって多義語 *over* の放射状カテゴリー構造を説明している。

一方日本語でも様々な多義語研究が行われるようになってきたが、とりわけ格助詞デの放射状カテゴリー構造を研究したのものとしては、間淵(2000)、森山(2002)などがある。

間淵(2000)は通時的調査を実施し、デの意味拡張の通時的プロセスを明らかにした。それによれば基幹的用

法（認知言語学で言うプロトタイプの用法に相当する）は場所格で、そこから手段格・様態格がまず派生し、さらに後に動作主格や原因格が基幹的用法から派生したと述べている。

また森山（2002）は格助詞デの意味構造を共時的に分析し、プロトタイプの用法が場所格であること、デの個々の意味は「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景（事態成立の基盤やさま）を補足的に示す」といったスキーマの意味を共有していることなどを主張した。

3. デの放射状カテゴリー構造

まず、これまでの辞書や学習書、研究においてデの様々な意味・用法がどのように分類されてきたかを見てみることにする。表1は『日本語教育事典』（大修館書店）、『日本文法大辞典』（明治書院）、『新明解国語辞典』（三省堂）、『日本語文法セルフマスターシリーズ3 格助詞』（くろしお出版）、『外国人のための日本語例文・問題シリーズ7 助詞』（荒竹出版）及び間淵(2000)の分類をまとめたものである。

表1 これまでの格助詞デの意味用法の分類のまとめ

日本語教育事典	日本文法辞典	新明解国語	例文問題シリーズ	日本語文法	間淵(2000)
道具・方法	手段	方法・手段	道具・手段	道具・手段	道具・手段
材料	材料	材料	原材料・媒体	材料	原料・材料・構成要素
原因	原因・理由・根拠	原因・理由	原因・理由	原因	原因・理由・根拠・動機
場所	場所・場面	場所・場面	場所	具体的場所 抽象的場所	場所・抽象的空間・場面
状態	状態	状態	状態	様態	様態・状態
主体の量的限定	範囲		範囲・限定	範囲	範囲限定
	限度		数限定・区切り	限度	限定
時間	期限				期間の限定
	時期(では)	時点(では)			
動作主	動作組織・団体	動作主	動作集団	動作主	動作主
			遠慮・謙遜		その他

注) 表中、行に区切りのあるものは、別のカテゴリーとして扱われていることを示す。また太線の区切りは、本稿での（カバータームとしての）カテゴリーの区分でもあることを示している。

これを見るとデの意味用法の分類にはかなりの相違点が存在することがわかる。表1の結果をふまえるようにしてデの意味・用法を再度分類してみると以下ようになる(以下、< >はカバータームとしての用法をさす)。

- <道具> : 道具、手段、材料、媒体、構成要素
- <原因> : 原因、理由、根拠、動機
- <場所> : 場所、場（抽象的場所、場面）
- <様態> : 動作主・対象の様態、作用・できごとの状態
- <限定> : 範囲、数量限定、期間、時限定
- <時間> : 時間
- <動作主> : 動作主、動作集団

ところで森山(2002)によれば、格助詞デの個々の意味は「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景（事態成立の基盤やさま）を補足的に示す」といったスキーマの意味を共有している。またデが表す具体的意味は「認知主体がどのようなドメインを持って事態に対するかにより主観的に選ばれ言語的に明示化されるもの」である

としている。例えば図1は認知主体（V）が動力連鎖の原因を補足的に示そうとしている場合で、背景のドメインとして原因のドメインが設定されている。その結果、背景格としてのデ格は、原因を表すようになる。

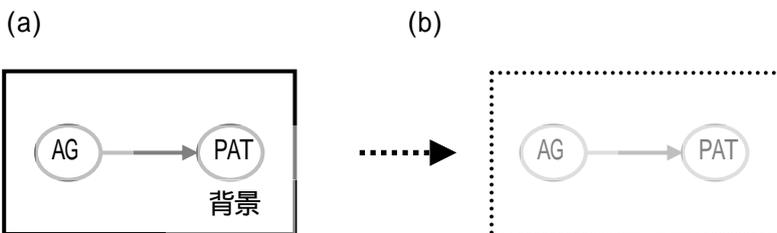
図1 認知主体のドメインと動力連鎖の背景と関係（森山 2002）



しかし、デを用いるにあたり、認知主体によって「背景」として選ばれる認知ドメイン¹を一つ一つ見比べてみると、大きく2通りのドメインが存在することがわかる。

一つは「現実世界」に依拠した客観性の高い背景ドメインで、〈場所〉用法の「場所」をはじめ、〈限定〉、〈動作主〉などの意味にデが使用される際に、「背景」として選ばれるドメインである（〈時間〉用法もこれからの拡張によるものであるが、これについては後述する）。これらのドメインは、実際の現実世界に文字通り空間的な「背景」として存在する「空間的な場」に依拠している。動作主（AG）、被動作主（PAT）などの参与者とその動力連鎖とによってなされる事態を、舞台上での役者たちにより演じられる演劇にたとえるなら²、ここでの「背景」の役割は空間的なもの、すなわち演劇における舞台（stage）の役割を持っている。このような「背景」を図2 (a)のように表すとしよう。動作主（AG）、被動作主（PAT）などの参与者が丸、参与者間の動力連鎖が矢印、舞台の役割としての「背景」が、事態を取り囲む四角い枠で描かれている³。また色の濃淡はプロファイルされているか否かを表す。図2 (a)では枠が濃い実線、動力連鎖が薄い実線で描かれているが、これはデがその背景をプロファイルするものであることを示している。

図2 現実世界のドメインと認識世界のドメイン（図1で示されている認知主体Vは省略した）



もう一つは「認識世界」に開かれた主観的な背景ドメインで、これは〈道具〉、〈原因〉、〈様態〉の意味にデが使用される際に認知主体の頭の中に設定されるものである。これらは事態の展開に対し、実際の現実世界に空間的な「背景」として存在するものであるというよりは、事態成立に対し機能的な「背景」の役割を持って存在するものである。具体的にいえば、〈道具〉、〈原因〉などのように、事態の主たる参与者ではないが、何らかの形で事態成立に「背景的」に関わっていたり、〈様態〉のように、事態を言語的に描写・表現するにあたり、事態成立に「背景的」、「補足的」な内容を付加する役割を担っていたりする。これらは項という形で言語化されることはないが、認知主体が何を補足的に示そうとするかに応じて背景的に言語化され、デ格で表されることになる。これも演劇にたとえて言えば、主たる役者たちによって演じられる演技を様々な形で引き立てる、大道具・小道具や、エキストラなどに相当しよう。こちらのほうは、舞台のように空間的構図としての「背景」ではないが、機能的な意味で「背景」の役割を担っている。これは図2 (b)のように表すことができよう。図で「背景」を表す四角い枠が点線で描かれているのは、背景ドメインが空間的なものから機能的なものへと主観化されている

ことを示している。

(a)と(b)との関係は、(a)の「背景」は現実世界に依拠した客観性の高いものであるのに対し、(b)の「背景」は認識世界における主観的なものであるが故に、認知言語学的に考えれば、(b)は(a)からメタファー的に拡張されたものであると考えることが可能であろう。(a)から(b)に伸びる点線の矢印は、(b)が(a)の拡張であることを示している⁴。

3 - 1 現実世界におけるドメイン

前節では、デが用いられる際に喚起される「背景」としての認知ドメインには、現実世界の客観的ドメインと、認識世界の主観的ドメインの2通りのドメインが存在すること、後者は前者からの拡張によるものであることを述べたが、現実世界のドメインの中でも典型的なドメインは、やはり実際の事態の空間的な背景を提示する<場所>用法であろう。これは間淵(2000)、森山(2002)などの先行研究の見解とも合致している。従って本節では、まず<場所>用法について述べる。

3 - 1 - 1 場所 (場所の抽象化) 場

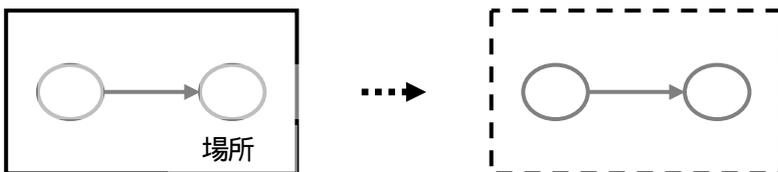
認知言語学によれば、一般に同一の意味カテゴリー内における拡張は、具体的用法をプロトタイプとして、そこからメタファーなどの動機づけによって、より抽象的な用法へと進むとされている。従って<場所>用法の中では、具体的場所の用法がプロトタイプとなり、より抽象的な場所用法はそこからの拡張と考えることができる。

従って抽象的場所を表す場の用法は、動作が行われる場所が、具体的な場所から抽象的な場所へ拡張されたものである。図3はLangacker(1991: 285)のStage modelの図式化を参考に、「場所の抽象化」の拡張プロセスを示している。図3の左側はデの具体的場所用法、右側は抽象的場所(場)の用法を示している。図右の枠が破線で示されているのは、背景としての場所が抽象化していることを意味する。また左右の図を結ぶ太い点線の矢印は図左から右へ拡張が起こっていることを示している。

また例文(1)はデの「具体的場所」、(2)はデの「抽象的場所(場)」の用法を示している。

- (1) その会議はアメリカで開かれる。
- (2) 彼の計画ではこの問題は扱われていない。

図3 場所用法における場所の抽象化



3 - 1 - 2 場所 (動作の抽象化) 限定(範囲・数量限定)

<限定>用法のうち、「範囲」、「数量限定」の用法は、プロトタイプとしての場所用法からの拡張であると考えられる。まず「範囲」の用法は、その場所で行われる動作が具体的な動作から「検索する」という心的走査⁵へと主観化されたものであると考えることができる。また「数量限定」の用法は、その場所で行われる動作が、具体的な動作から「数を数える」、「量を計る」という心的走査へと主観化されたものであると考えられる。但し「数量限定」の用法は、「範囲」の用法に比べると、心的走査が行われる範囲の境界部分に焦点が当てられ、その際立ちの度合いが高まっており、それが「限定」の意味合いを与えている。また「範囲」の用法における場は空間的なものであるが、「数量限定」の場は1次元的なスケールとなるという点も異なっている。図4は<限定>用法における「動作の抽象化」の拡張プロセスを示している。図左の具体的な動作は実線の矢印で示されているのに対し、図右の主観化された動作(心的走査)は点線の矢印で示されている。

また(3)のデは「範囲」の用法、(4)のデは「数量限定」の用法で、それぞれ、「(山を)検索する」心的走査や、

「数を数える」心的走査が行われる領域がデで示されている。

(3) エベレストは世界で一番高い山です。

(4) 30人で締め切ります。

図4 限定用法における動作の主観化（左が場所用法、右が限定用法）



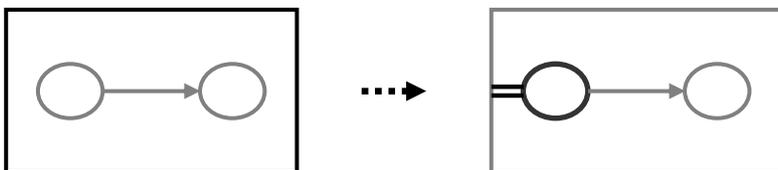
3 - 1 - 3 場所（場所の背景化） 動作主

<動作主>の用法も、プロトタイプとしての場所用法からの拡張であると考えられる。デは本来、動作が行われる場所を示すものだが、<動作主>用法は、メトニミー的拡張により、動作の行われる場所を「参照点(reference point)」として、最終的にはその場所と密接な関わりをもつ動作主に意識を向けさせるものと考えられる(Langacker 2000 : 171-202)。ここでLangackerは、メトニミーが人間の基本的な認知能力の一つである参照点能力によるものであることを説明している。図5では右が動作主の用法を示している。場所を示す四角い枠の色が薄くなっているが、これは場所が参照点として機能した後背景化されることを示している。また四角い枠と動作主とが二重線で結ばれているが、これは警察と警察の人々の関係のように、場所と動作主とが密接な関係を持つことを示す。

また(5)のデは警察という場所を参照点として、警察の人々が動作主として示されている。

(5) その事件は警察で捜査しています。

図5 動作主用法における場所の背景化（左が場所用法、右が動作主用法）



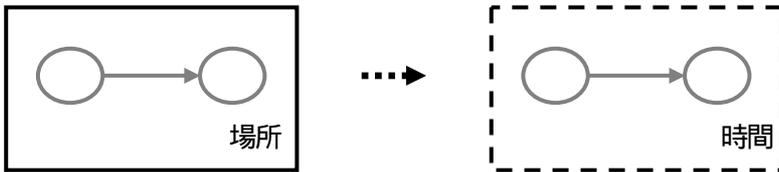
3 - 1 - 4 場所（メタファー写像） 時間（境界の焦点化） 期間・時限定

デの<時間>用法は、日本語に限らずさまざまな言語で広く用いられている「場所(空間的な場)から時間(空間的な場)へのメタファー写像による変換」によるものである。図6の右図で、四角い枠が破線になっているのは、<時間>用法が<場所>用法のメタファー写像による変換によって拡張してできたものであることを示している。但しここでの時間は、動作が行われる(舞台としての)場所からの拡張によるものであるため、抽象的なながらも「境界を持つまとまりを持った場」としてとらえられている点が格助詞二などで表される時間とは異なっている。例えば(6)'で、二で表された「食事のあと」は単に時間の表示であるのに対し、(6)で、デで表された「食事のあと」は、食事のあとの「(時間、空間両面の意味を備えた、まとまりのある)場」を示している。(7)は「期間」、(8)は「時限定」の用法であるが、これらは「時間」用法からの拡張であると考えられる。また「期間」と「時限定」は、それぞれ場所の抽象的用法の「範囲」と「数量限定」とが、メタファー写像による変換により時間的に用いられたものとも考えることもできる。したがって「時限定」の用法は「数量限定」同様、その境界部分が焦点化されている。但し空間とは異なり、時間は1次元的なものであることから、「期間」や「時限定」の用法における場はともに1次元的である。

(6) 食事のあとで、勉強をします。

- (6) 食事のあとに、勉強をします。
- (7) 成長の過程で一時的に現れる現象です。
- (8) 長かった夏休みも明日で終わります。

図6 時間用法におけるメタファー写像（左が場所用法、右が時間用法を示す）



3 - 2 認識世界におけるドメイン

人間は外界のある事態を認知するにあたって、Langacker の Stage model に表されているように、参与者間の具体的な動力連鎖を前景としてとらえ、それが展開される「場 (setting)」を背景としてとらえる傾向がある。ここにおいて「場」は、プロトタイプとしては、その動力連鎖が展開する空間的な場所であり、従って「背景」とは本来、前景の動力連鎖と共に、現実世界に存在するものである。しかし「背景」の役割が主観化され、前景に対する背景のドメインが認識世界に変換（現実世界から認識世界へのメタファー写像による変換）されると、背景としての役割は機能化して、前景の参与者間の動力連鎖を成立させる補足的、背景的なドメインを示すようになる。

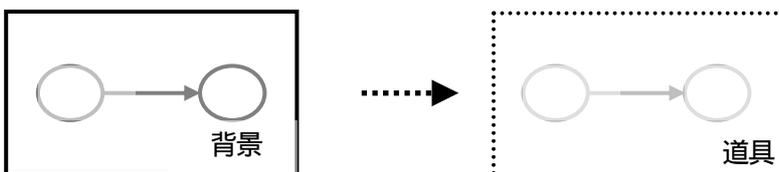
3 - 2 - 1 場所（ドメイン主観化） 道具・手段（内在化） 材料・構成要素

その一つが<道具>用法である。<道具>用法は、前景の参与者間の動力連鎖に対し、それが成立するための機能的な背景として、補足的に<道具>の関与が示されたものと考えることができる。上述したように場所用法から<道具>用法が拡張するにあたって、ドメインは現実世界から認識世界へとメタファー写像により変換され、その結果、前景に対する背景の役割は機能化、主観化している。これを図式化したのが図7である。

(9)~(12)はそれぞれ道具、手段、材料、構成要素の用法である。このうち道具、手段は個別性、具体性が高く、材料、構成要素は、他の存在に内包されるという意味で、個別性が低く、属性的である。それゆえ認知的な際立ちという点でいえば、道具、手段は際立ちが高く、内在化された材料、構成要素は際立ちが低い。

- (9) 日本人は箸でものを食べる。
- (10) 毎日地下鉄で学校へ来ます。
- (11) この机は木でできています。
- (12) 日本文化の特徴という題目で論文を書きました。

図7 道具用法におけるドメイン主観化（左が場所用法、右が道具用法を示す）



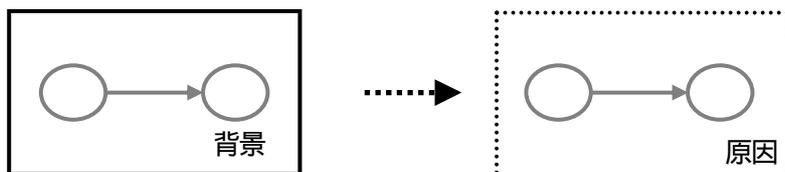
3 - 2 - 2 場所（ドメイン主観化） 原因（主観化） 理由・根拠・動機・目的

<原因>用法は<道具>用法と同様に、人間が事態を認知する際の前景に対する背景が主観化されたものである。ここでも「背景」は機能化しており、前景の参与者間の動力連鎖に対し、それが成立するための<原因>の関与が、背景的、補足的に示されたものである。これを図式化したのが図8である。<原因>用法の中には、事

態との関係（因果関係）が現実世界に存在する客観性の高いものや、認知主体の認識世界に主観的にのみ存在するものなどがある。「原因」は事態との因果関係が客観的に存在する場合が比較的多く、「理由」では客観的に存在する場合と主観的に存在する場合とが考えられ、「根拠」では事態との関係はもっぱら認知主体が定立する主観的なものとなる。さらに「動機・目的」では事態が未だ実現していないことから、事態との関係は主観的である。また動作主(13)~(16)はそれぞれ「原因」_レ、「理由」_レ、「根拠」_レ、「動機・目的」の用法である。

- (13) 病気で学校を休む。
- (14) そういう点でおもしろいと思う。
- (15) 試験の結果で判断する。
- (16) 出張で大阪へ行ってきた。

図8 原因用法におけるドメイン主観化（左が場所用法、右が原因用法を示す）

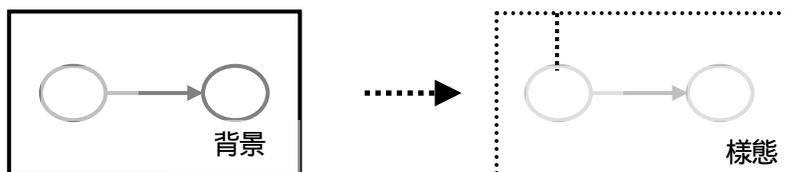


3 - 2 - 3 場所（ドメイン主観化）様態

<様態>の用法も、<道具>、<原因>用法と同様に、人間が事態を認知する際の前景に対する背景が主観化されたものであると考えられる。<様態>用法は、「認知主体が言語化を行うに際し、前景（参与者間の動力連鎖）が成立するさまを背景的、補足的に示す」といったものとなっている（その意味で「背景」の役割は機能的である）。これを図式化したものが図9である（図は動作主の様態を示す用法）。様態から動作主に向かう点線は、それぞれの<様態>用法が前景のどの部分の補足的役割を示しているかを示している。また(17)~(19)はそれぞれ動作主の様態、被動作の様態、作用・できごとの様態を示している⁶。

- (17) 夕ご飯は自分で作って食べます。
- (18) 迷惑にならないよう、小さな音で音楽を聞きました。
- (19) 猛スピードで走っています。

図9 様態用法におけるドメイン主観化（左が場所用法、右が様態用法を示す）



4. まとめ

本稿で明らかになったことを、格助詞デの放射状カテゴリー構造、習得過程との関係、及び英語との対照という3つの点から整理してみる。

4 - 1 格助詞デの放射状カテゴリー構造

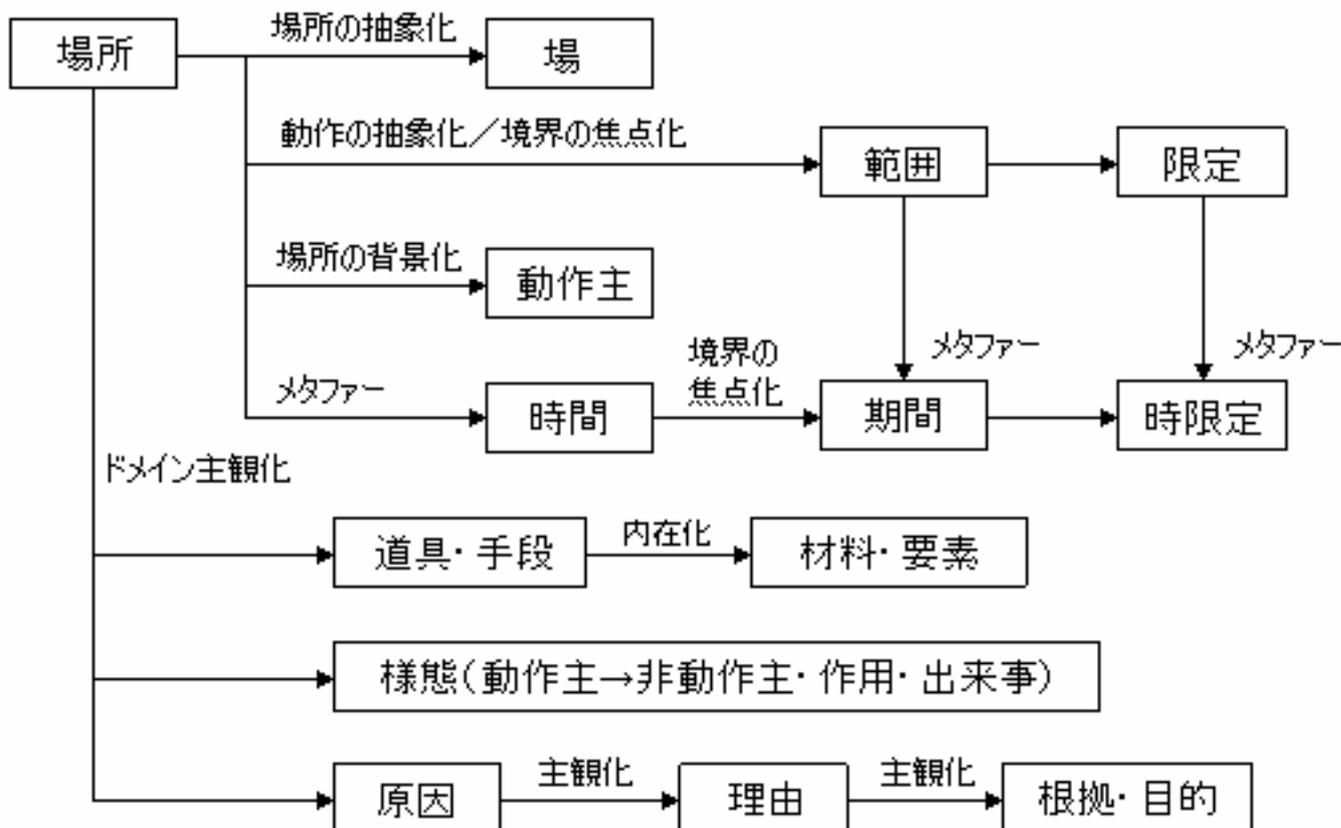
まず前章の分析に基づいて格助詞デのカテゴリー構造をまとめると、図10のようになるとと思われる。

これを見ると次のようなことがわかる。

プロトタイプとしての<場所>用法で、場所、動作など一部が抽象化したり、メタファー写像により変換したり、メトニミー変換により場所が背景化（動作主が焦点化）したりすることにより、「場（抽象的场所）」、「限定（範囲、数量限定）」、「動作主」などの拡張的な用法が派生する。また<時間>用法も、空間から時

間へのメタファー写像により、プロトタイプとしての<場所>用法から派生したものである。現実世界から認識世界へのメタファー写像によって引き起こされるドメインの主観化により、「背景」としての場所の概念が機能化し、様々な主観的なドメインが形成され、<道具>、<様態>、<原因>などの用法が拡張している。それぞれの用法の内部でも、抽象化、内在化や焦点化などにより、さまざまな用法が拡張的に派生している。

図 10 格助詞デの放射状カテゴリー⁷



4 - 2 放射状カテゴリー構造と習得過程との関係について

次に格助詞二の放射状カテゴリー構造と言語習得との関係を考えてみたい。言語（語）とはカテゴリーに貼られたラベルであると考え、言語の習得とはカテゴリー化のプロセスと表裏一体のものであるといえる。また基本的にカテゴリー化がその内部においてプロトタイプからその拡張へと進むわけであるから、言語習得もまたプロトタイプ的な意味が先で、拡張的な意味は習得が遅れると考えることができる。

但しこのような傾向は、母語（第一言語）習得のプロセスではカテゴリー化の認知プロセスと並行した形で言語の習得が行われるため、言語習得のプロセスがかなりはっきりとプロトタイプからその拡張へと進むことが確認できるかもしれない。しかしながら第二言語習得の場合には、学習者の頭はすでに母語の処理のために特化され、最適化した状態にあり、母語習得時に一度完了したカテゴリー体系がメタ知識として潜在的知識を形成している。第二言語（目標言語）の新しいカテゴリー体系が母語のそれと全く同じであるとは考え難いため、第二言語習得時には、母語のカテゴリー体系は概念変化のプロセスによって、第二言語の新しいカテゴリー体系に作り変えられなければならない。しかしその場合には、転移など、母語のカテゴリー体系が第二言語のカテゴリー化にどのように関わっていくのかが問題となる。

今井(1993)、Shirai(1995)、Ijaz(1986)などによれば、プロトタイプが母語の影響を受けやすいこと、周辺の意味の習得が困難なこと、意味表象が拡散的で放射状構造を持たないことなどが指摘されている。これからわか

ることは、第二言語習得に伴って進むカテゴリー化のプロセスは、大まかに言えばプロトタイプから周辺の拡張例へと進むであろうと推されるが、それはすでに学習者の脳内に確立されている母語のカテゴリー体系の影響を受けつつ行われるということである。したがって第二言語習得のプロセスは母語習得時ほどには、プロトタイプから拡張へといったカテゴリー化のプロセスを十分に反映しない可能性がある。しかし両者に何らかの相関が見られるとするならば、第二言語習得にプロトタイプ効果などのカテゴリー化のプロセスが反映していること、さらには言語習得とはカテゴリー化のプロセスと並行して進むものであることを示すことができる。

第二言語習得のプロセスがどの程度カテゴリー化のプロセスと一致するかについては、実証的な検討を行いながら稿をかえて論じることにはしたい。

4 - 3 日英両語の対照

最後に本研究で明らかになった日本語のデ格の意味構造を、英語の「具格」や「場所格」などと比べてみたいと思う。Langacker(1991 : 282-412)が詳述しているように、英語では<道具>は参加者の資格を与えられ、格標識も「具格」で表され、「場所格」で表される<場所>とはカテゴリーを異にしている。しかし日本語では、<道具>は<場所>の拡張として、同じ格標識デが用いられている。こうした日英両語の違いをどのように考えるべきなのであろうか。英語は「Billiard-ball model (Langacker 1991)」に示されるように、客観的に事態を参加者間の「動力連鎖 (action chain)」としてとらえる傾向があり、その結果、動力連鎖に直接参加する<道具>は動作主 (AG)、非動作主 (PAT) などの参加者とともに前景となって、その背景 (setting) に比べると、優位な立場に置かれ、その際立ちも高い。そのため、<道具>を表す前景格としての「具格」は、背景格の<場所>を表す「場所格」とは異なるマーカーで示される。これに対し日本語は、池上 (1981) でナル型の言語と言われているように、事態を場に来るものとして環境論的にとらえる傾向がある⁸。その結果、前景となる参加者は動作主、受領者、被動作主などの中心的な役割に限られ、<道具>はそこから外れ、むしろ事態が出来る背景、補助的なものとして、事態が出来る場のほうに埋め込まれ、<場所>同様に背景格としての位置を与えられるようになり、「場所格」をプロトタイプとするデで表されるようになったと考えることができる。

<注>

- 1 ドメイン (domain) とは正式には認知ドメイン (cognitive domain) をさす。Langacker の用語で、語の意味を得る際に前提となるベース (base) の属する概念領域のこと。
- 2 このたとえば Langacker(1991)の Stage model を参照にしたものである。
- 3 実際の事態の参加者は動作主 (AG)、被動作主 (PAT) に限らないが、本稿では Langacker(1991)の Stage model での図式化に従い、代表として動作主 (AG)、被動作主 (PAT) の動力連鎖を示すことにした。
- 4 「背景」の役割の現実世界から認識世界への拡張は、非連続的なもののようにも思われるが、以下の例を見ると連続的であることがわかる。
 - (i) 英語で考えてみましょう。(道具)
 - (ii) 毎日有楽町線で通勤しています。(手段)
 - (iii) 台風で試合が延期になった。(原因)

(i)ではデが「道具」の意味で用いられているが、「考える動作」が行われる抽象的な意味での「場所 (言語領域)」と考えることもできる。同様に(ii)ではデが「手段」の意味で用いられているが、通勤の行われる「場所 (ルート)」とも考えられる。また(iii)のデは「原因」の意味だが、これを「試合延期」という事態が起こる「場所 (状況)」として考え、それが試合延期を引き起こす「原因」となっていると考えることもできる。このように考えれば、これらの用法は見方によっては図2(a)のようにも考えられる。以上のように現実世界から認識世界への「背景」の役割の拡張は決して非連続的なものではなく、連続的拡張によってもたらされたものであるともいえる。このことは見方を変えれば、格助詞の意味の連続性を示しているということもできる。多義語の

-
- それぞれの意味は明確な境界をもって区分されているわけではなく、意味の境界はファジーで連続的なのである。この点については格助詞の意味（解釈）のゆらぎを研究した山梨（1993）も参照のこと。
- 5 心的走査（mental scanning）はLangackerの用語で、実際の走査ではなく心の中で行われる走査をさす。
- 6 但し森山(2002)でも指摘されているが、〈様態〉のデを格助詞のカテゴリーに含めるべきかどうかは、議論の余地がある。
- 7 デの用例を詳細に見ていくと、より細かな拡張関係が存在するが、ここでは本稿で明らかになった拡張関係のみを図式化した。
- 8 こうした日英両語の違いは、それぞれの言語の主観性の強さとも関連があると思われる。客観性の強い英語は、事態を客観的にとらえる傾向が強いために、一つの事態（動力連鎖）全体が節として表される中で、動力連鎖へ直接参与する動作主（AG）、道具（INSTR）、被動作主（PAT）がそれぞれ代表的な参与者として項で表される。これに対し英語に比べて主観性把握をする傾向が高い日本語では、事態を主観的にとらえ、認知主体である人間との共通性が高い、経験主（EXPER）、被動作主（PAT）などが代表的な参与者となる反面、人間との共通性が低い道具（INSTR）などは代表的な参与者から除外され、背景化されるのだと考えることができる。日英両語と主観性との関係については池上（2000）をも参照。

<参考文献>

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』、東京：大修館書店。
（2000）『「日本語論」への招待』、東京：講談社。
- 今井むつみ(1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点：意味表象の見地から」『教育心理学研究』41:243-253。
- 北川千里、鎌田修、井口厚夫(1995)『外国人のための日本語例文・問題シリーズ7 助詞』、東京：荒竹出版。
- 財団法人日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』、東京：大修館書店。
- 益岡隆志、田窪行則(1987)『日本語文法セルフマスターシリーズ3 格助詞』、東京：くろしお出版。
- 間淵洋子(2000)「格助詞『で』の意味拡張に関する一考察」『国語学』51:15-30。
- 森山新(2002)「認知的観点から見た格助詞デの意味構造」『日本語教育』115:1-10。
- 山口明穂、秋本守英編(2001)『日本文法大辞典』、東京：明治書院。
- 山田忠雄、見坊豪紀、金田一春彦、柴田武、金田一京助編(1988)『新明解国語辞典（第三版）』、東京：三省堂。
- 山梨正明(1993)「格の複合スキーマモデル：格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」、仁田義雄編『日本語の格をめぐって』、東京：くろしお出版、39-66。
- Dewell, R. B. 1994 *Over again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis. Cognitive Linguistics* 5: 351-380.
- Ijaz, I. H. 1986 Linguistics and cognitive determinants of lexical acquisition in a second language. *Language Learning* 36:4.
- Lakoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, R. W. 1991 *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2. Stanford University Press, California.
- 2000 *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Norvig, P. & G. Lakoff. 1987 Taking: A Study in Lexical Network Theory. *BLS* 13: 195-206.
- Shirai, Y. 1995 The Acquisition of the basic verb PUT by Japanese EFL Learners: Prototype and Transfer. 『語学教育研究論叢』12:61-92.